編入学生の孤独感のPAC分析[1]

内 藤 哲 雄

A PAC Analysis of the Loneliness of a Transferred Student

Tetsuo Naito

問　題

Peplau,L.A. & Perlman,D.（1982）によれば，1960年以前の孤独感についての心理学的研究は臨床的観察によるものが大半であり，1960年代に入って出版物が増加し実証的研究も多くなってきたが，実証研究が急速に発展したのは1970年代になってからとされている。孤独感の実証研究を先導する役割を果たしてきたのは，下位概念に孤立感や疎隔感を包含する疎外の研究である。

われわれは，自身について，周りの人について，社会について，どのように解釈するかによって，情動反応，感情，対人行動，集団行動に大きな影響を受ける。社会学者であるSeeman（1959）は，人々が客観的にどのような状況に置かれているかの「疎外」状況についてではなく，人々が主観的に感じる疎外感情にこそ意味があると主張し，「疎外感」を構成する下位概念として「社会的孤立感」「自己疎隔感」「無力感」「無規範感」の４つを提案した。この定義が嚆矢となって，社会心理学者たちが尺度構成を試みて調査研究に着手したことで，疎外研究が陸続したのである。社会的客観的側面を重要視する理論と心理的主観的側面を重視する理論との間にしばしば鋭い緊張や対立が生じながらも，疎外感の研究が活発となり，工場労働者などの実地調査によって疎外感の研究がかなりの成果を上げてきた（例えば，Blauner，1964）。ここで「社会的孤立感」と「自己疎隔感」に目を向けると，これらは孤独そのものの感覚や感情であることがわかる。残りの「無力感」と「無規範感」は，集団や社会への所属感や準拠集団としての意識ないしはアイデンティティの喪失感によって引き起こされるものと解釈することができる。疎外感の研究成果は，孤独感を単独テーマとして研究するための基盤となったのである。

疎外についてと同様に，個人が他者から受け容れられず，客観的に孤独の状況にあるか否かよりも，個人がその状況からどの程度までの孤独を感じるかが，心理学的な適応にとっては大きな問題となる。孤独についても，主観的な孤独感が検討対象となり得るのである。孤

[1] 本研究は，平成６年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｃ：研究課題番号06610106）による研究成果報告書，『個人別態度構造に関する研究』（内藤，1995）の一部を改稿したものである。また，本研究のデータ部分の概要については，内藤（2000b）日本グループ・ダイナミックス学会第48回大会（東洋大学）において発表された。

独感は，主観的・現象学的なデータを科学的・数量的にアプローチしようとする心理学分野の「主観的行動主義者」(Miller, Galanter, & Pribram, 1960) にとって，格好の研究テーマとなったのである。

上述のように，孤独感は現象学的に捉えられるべき主観である。そこで，多標本データによる分析を試みる研究者も，研究の主発点として，手記，面接，自由記述を利用することが多い。わが国においても，落合 (1982, 1983, 1985)，広沢 (1985, 1986)，工藤 (1986)，諸井 (1989, 1995) らの研究をあげることができる。しかしながら，それらのすべてが，各調査対象者の回答内容をバラバラに解体して，多標本調査での質問項目の素材とする形に終わっている。確かに，解体された項目によっても，他者との比較を容易にする標準化された尺度を作成することができ，多くの人に共通するいわゆる普遍的な変数を抽出することができる。これによって明らかにされた知見も多い。ところが，多標本での平均値と標準偏差によって個人の孤独感の強さを診断したり，下位集団間の差異を分析する方法では，個々人に特有な変数が残差成分として排除されてしまうことになる。そして，実際には該当する変数の内容が個人ごとに異なっているとしても，調査対象者全体に共通とされる変数によってのみ個人得点が決定される。このため個人特有のメカニズムを発見・診断したり，特有性に基づいたタイプ分けが困難となる。例えば，落合 (1999) は，集団データによる数量的分析では，「一番問題だったのが，ダイナミックさが失われたことです。『孤独でいたいけど，孤独ではいたくない』というようなアンビバレントな心理状態は，分析した結果には出てこないで消えてしまいました。(P15.)」と述べている[2]。そこで落合自身は，「事例研究もまた実証的研究です。事例研究と数量的研究を合わせた実証的研究をすることにより，説得力が大きく増大するのです。(Pii.)」と記述し，追加的に事例研究を取り上げている (注：ここでの落合の「数量的研究」は，多標本データによるものを指す)。

確かに，落合の指摘するように，特有性・複雑性・統合性そのものにアプローチするには事例研究法が有効である。この方法では，①孤独感に関わる多種多様な重要変数やメカニズムを発見したり個人レベルでの実在を検証することで，多標本での数量分析による研究を補完するだけでなく，②当該個人に特有な孤独感の構造を解明・診断し，臨床的に関わることが可能である[3]。とくに後者の臨床的見地からは，孤独感の強さや利用される防衛機制や対処機制の存在がわかるだけでなく，当該個人において，具体的に何によって，どのような種類の孤独感が生じ，現実にどのような防衛・対処機制を用いているのかを分析することが不可欠である。しかし伝統的な事例研究法では，研究者の理論的視点や主観が関与しやすいことが知られている。操作的・客観的な水準を高めることが要請される。落合は「数量的研究」と「事例研究」とを両立し得ないものとして対置させているが，事例研究においても，操作性・客観性を著しく高めることになる数量的解析の援用を試みるべきであろう。こうし

---

[2] 内藤 (2000c) は，「接近・回避のループ型」が存在することを，後述するPAC分析の技法を用いて実証した事例を報告している。

[3] 集団の平均値モデルとしてのメカニズムが，個のレベルで実在する保証はない。太陽系の惑星について全ての元素を平均値化した惑星は存在しない。また，逆に個のレベルで存在することが平均値モデルで確認できるという保証もない。生態系が関与した独自の環境システムを持つ惑星は，少なくとも太陽系には地球以外には存在しない。

た規準に適合すると考えられるのが，内藤（1993，1997，2002a）によって開発されたPAC分析の技法である。これは，当該テーマに関する自由連想，連想項目間の類似度評定，類似度距離行列によるクラスター分析，当人によるクラスター構造のイメージや解釈の報告，研究者（実務者）による総合的解釈を通じて，個人別にイメージ構造を分析する方法である。

ところで，異文化で暮らす外国人留学生は，母国の人間関係のあり方（スキーマ）と日本人の人間関係スキーマとの違いに直面し（閻・内藤，2005；内藤，2005a，2005b，2007，2008a；Naito, T., 2006），「社会的孤立感」と「自己疎隔感」を感じやすく，「無力感」と「無規範感」に直面しやすいといえよう。PAC分析を用いての留学生の孤独感についての研究は，これまで内藤によっていくつも報告されている（内藤，2000a，2000c，2001a，2001b，2002b，2003a，2003b，2004）。

社会集団にはそれぞれに独自の文化が存在する。内国においても所属集団を変更してそれほど期間が経過しないときには異文化適応の問題が生じ，所属集団への適応の困難さにより孤独感が生じると考えられる。そこで本研究では，新たな所属集団への適応のための導入教育の必要性が知られている編入学生の孤独感を取り上げ，PAC分析によって孤独感の個人構造を明らかにし，診断的に評価することが可能であるかを検討することを目的とした。

方　法

被検者　被検者Aは，短期大学の卒業に引き続き4年制私立大学の学部3年次に編入学してから7カ月目の，自宅からの通学する女子である。

手続き　被検者に，まず孤独感について調査すること，自由連想された項目を用いて個人別にイメージの分析をすること，何時でも参加を中止できることを伝えた。ついで，調査結果について，匿名性を確保しプライバシーを保護するという条件で，学会の大会で発表したり，学術雑誌で公開をすることについて許可を求めた。自由連想の段階は集団事態で，デンドログラムのイメージや解釈を被検者から聴取する段階は被検者と検査者の二人で研究室で実施された。連想刺激は，以下のように印刷された文章を提示するとともに，口頭で読み上げて教示した。

「あなたは，どのような場面や状況で孤独を感じやすいでしょうか。そして孤独を感じているとき，自分がどんな状態にあると感じるでしょうか。また，どんな行動をしたいと感じたり，実際に行動しがちでしょうか。頭に浮かんできたイメージや言葉を，思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入して下さい。」

ついで，おおよそ縦3cm，横9cmの大きさのカード40枚を被検者の前に置き，頭に浮かばなくなるまで自由連想させた。このあと，今度は肯定か否定かの方向に拘わりなく重要と感じられる順にカードをならべ換えさせた。ついで項目間の類似度距離行列を作成するために，ランダムに全ての対を選びながら，以下の教示と7段階の評定尺度に基づいて類似度を評定させた。

教示と評定尺度　教示は，下記の＜教示と評定尺度＞が印刷された用紙を被検者に提示したまま，「　」の部分を口頭で読みあげることでなされた。

「あなたが自身の孤独感に関連するものとしてあげたイメージや言葉の組み合わせが，言葉の意味ではなく，直感的イメージの上でどの程度似ているかを判断し，その近さの程度を下記の尺度の該当する記号で答えて下さい。」

非常に近い……A
かなり近い……B
いくぶんか近い……C
どちらともいえない……D
いくぶんか遠い……E
かなり遠い……F
非常に遠い……G

クラスター分析及び被検者による解釈の方法　上記の類似度評定のうち，同じ項目の組合せは0，Aは1，Bは2，Cは3というように，0から7点までの得点をあたえることで作成された類似度距離行列に基づき，統計ソフトHALBAUを用いてウォード法でクラスター分析した。ついで析出されたデンドログラムの余白部分に連想項目の内容を記入し（Fig. 1 参照），これをコピーして1部は被検者がもう1部は検査者が見みながら，以下の手順で被検者の解釈や新たに生じたイメージについて質問した。まず，検査者がまとまりをもつクラスターとして解釈できそうな群ごとに各項目を上から読みあげ，項目群全体に共通するイメージやそれぞれの項目が併合された理由として考えられるもの，群全体が意味する内容の解釈について質問した。これを繰り返して全ての群（クラスター）が終了した後，クラスター1とクラスター2，クラスター1とクラスター3，クラスター2とクラスター3の組み合わせで，クラスター間を比較させてイメージや解釈の異同を報告させた。この後さらに，全体についてのイメージや解釈について質問した。続いて，検査者として解釈しにくい個々の項目をとりあげて，個別のイメージや併合された理由について補足的に質問した。最後に，各連想項目単独でのイメージがプラス，マイナス，どちらともいえない（0）のいずれに該当するかを回答させた（Fig.1の連想項目の後ろに付加された（　）内の符合を参照）。

結果と考察

被検者は，最初の段階で調査への参加を何時でも中止できることについて確認し，調査の最終段階まで参加した。最後に，検査者が匿名性を確保するという条件で結果を研究大会での発表や学術雑誌での公開することについて再確認したところ，被検者はこれを了承した。

クラスター分析の結果は，Fig.1のようになった。連想項目が31とかなり多いので，焦点がぼけないように，重要順位の高い順にほぼ1/5となる6項目をとりあげることにする。これらの項目は，①その場にいない親しい友達にあとで心のうちを話す（+），②誰かと仲よくしたい（+），③勇気を出して話しかける（+），④まわりの目が気になる（−），⑤安心したい（−），⑥落ちつきたい（−），となった。「安心したい」「落ちつきたい」がともにマイナスなのは，（後続する被検者の説明から）親しくない，仲良くない人と一緒にいて望む

ことだからであろうと推測される。親しい友達がいない場面で，まわりの目を気にし，誰かと仲よくしたいと望みながら，その場を離れたあとで親しい友達に心情を開示することで，落ち着いたり，安心したいとの内容である。編入学という環境変化により，親しい友達がいないで，仲良くしてくれる人も，頼る人も，守ってくれる人もなく，見知らぬ人達に囲まれている不安から，孤独が生じていることを示すものである。これらの項目イメージは，プラスが3，マイナスが3であることから，重要項目順上位1/5の範囲内では，期待と不安の葛藤状況にあることを示唆する。つぎに全項目の単独でのイメージをみると，プラスが6，「0」が4，マイナスが21となり，マイナスイメージが圧倒的に強いことを示している。不安は親しい友達に打ち明けることでやわらげ，誰かと仲よくしようと勇気を出して話しかけることを重視するのだが，現実には話しかけてほしい，わかってほしいと期待するが，頼る人も守ってくれる人もなく，その場にそぐわないと感じ，他人のうわさにびくびくしていることを感じさせる。

ところで，Fig.1の，例えばクラスター2での結節をたどると，「まわりの目が気になる→安心したい→守ってほしい→待っている→つまらない→逃げたい」とか，「誰かを頼る→つらい→私はその場にそぐわない→逃げたい」，「誰かわかってほしい→話しかけてほしい→逃げたい」の時系列的な行動連鎖（スクリプト）を示唆している。同様に，クラスター3の，「他人のうわさにびくびくする→バリアーをはる→新学期の教室→浮いている」「緊張している→入学式→新学期の教室→浮いている」「まわりにかべがある→浮いている」については，時系列的な描写に対応している。これらの出力結果はレビンの場理論に対応するものであるが，連想項目の重要順位の順番で演算を進め，セミグラフィックで表示するHALBAUのソフトを採用していることによる（詳細については，内藤（2008b）を参照されたい）。

＜被検者Aによるクラスターについての語り＞

クラスター1は「その場にいない親しい友達にあとで心のうちを話す」～「うちとけるのを拒否している」までの13項目：新しい環境で，親しい人とかもいない所で孤独を感じると思ったので，そういうとこに（所で）誰かと仲良くしたい。それで孤独状況をなくすようにしたい。孤独といってもまわりの目があるから，まわりからみて私が孤独に見えるのが嫌だという感じ（が）あるから，まわりの目を気にしていて，それで，それで孤独を感じているのと，この「夜一人で家にいる（重要順12の［夜］13の［1人ぼっち］の併合）」ときに感じるのは違うと思うんですけど，一人ほんとに一人部屋とかで感じる孤独の方が気が楽で，まわりの目を気にしている孤独は，心が落ち着かないし，ちょっと緊張しているようで，すごく逃れたい気持がする。だけど今だけ我慢すればいいやと思って，本当は気にしてるんだけど，わざと逆に気にしてないように振る舞って，本当は仲良くしたいんだけども，自分からは動けない。自分から動けないというのもちょっと続きだと思うんですけど，人に助けてほしいとか，まわりが動いてくれないかなとか，自分のことを気にしてくれないかなとか，そういう風に思ってしまって，自分からは待っている。これぐらいです。

クラスター2は「まわりの目が気になる」～「逃げたい」までの11項目：ポッンと一人で淋しくしている。うまくまわりに打ち解けられなくて，どうにかしたいと思っている。

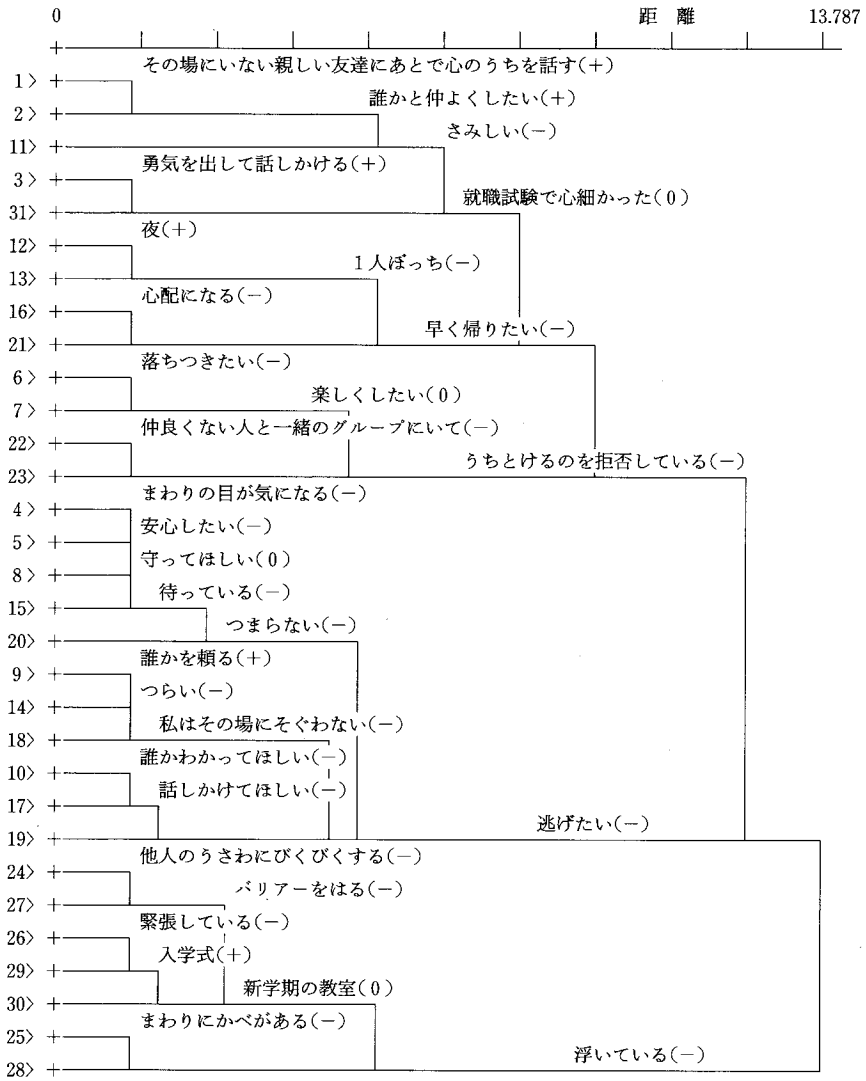

Fig.1. 被検者Aのデンドログラム.
1)左の数値は重要順位
2)各項目の後ろの( )内の符号は単独でのイメージ

……。(Q：まとまったのは？) うーん，初対面の人とあまり打ち解けるときに自分から積極的に話しかけられない方なので，いつも様子を見てしまう。まわりの人がどう動くのかを見ていて，それからでないとうまく打ち解けられないので，そういうときの自分の気持ちがこの固まりですけど。逆に自分がそういう人を，そういう人がいると気づいたら，自分と似ていると思うので，近寄っていく。うまく話せると思う。それぐらい。

クラスター3は「他人のうわさにびくびくする」〜「浮いている」までの7項目：新しい場面で，すごく一人でいるのが恐いので，誰かとすぐに仲良くしたいんですが，そういうときは，こう……，自分が浮いていて，うまくまわりになじめないので，ちょっとした他人の

行動が自分のことではないかと思えてきて，とても淋しくなる。そういうことに気がいかないように，安心できる友達が欲しい。小学校の時とかはおとなしかったので，こう……，最初に友達を作るときに，こうなかなかすんなりと友達ができなかったような気がするので，そういう経験からこれが固まったような気がする。あとはとくにないで（す）。

クラスター間の比較と全体について

≪クラスター1と2の比較≫私は孤独っていうのを全然いい意味では捉えていなくって，むしろ否定的に捉えていて，その状況をなくすためにも（他）人に何かをしてもらおうと考えていて，孤独からすごく逃げたがる。孤独は楽しめないと思う。だけど1（クラスター1）の方で「早く帰りたい」とか「夜」とか書いている項目は，まわりの目が気になっている，そういう孤独から逃れるために一人になって落ち着きたいという気持からできているので，また違う種類で，まわりの目を気にしないために一人になりたい，孤独になりたいと思っている。まわりに人がいたらまわりの目を気にして，まわりとうまく適応できない自分に対して孤独を感じると思うんですけど。自分が安心できる状況，家とか自分の部屋であるとか，そういった所で一人でいることはあまり孤独を感じないので，ただ一人でいることで孤独を感じるのではなく，まわりに人がいて，その人達とうまくいかないから，孤独を感じる。

≪クラスター1と3の比較≫自分で，こう，自分の友達とか仲良くできる範囲をとても狭くしていると思うんですが，本当に心を打ち解けられる人でないと，一緒にいても楽しくなくて，むしろ淋しかったりつまらなかったり，その人達とうまく話を合わせられないことが辛かったりするので，孤独は感じるけど，そのことは，打ち解けられない人と一緒にいるときは自分の中にしまっていて，自分がとても信頼している友達だとか，こう小さい時は家族とかの前では落ち着いて，あと緊張することも自由に振る舞える。自分のよく知らない人や自分のことをよく知らない人を，すぐには仲良くなれないので，時間がかかるので，時間をかけても自分と合わないと思う人は，話を合わせたりはできるけれども，大事な話だとか，自分のこう内側の話とかはできないので，そういう人とは，一線を置いて付き合う。

≪クラスター2と3の比較≫クラスとか同じ集団にいると，全員とは自分が合うとは思えないので，その中から自分が安心していられる場所，仲良くできる人を本当は自分から見つけたいんだけど，行動できなくて，見つけてもらうのを待っている。こういう孤独を感じているときには，誰かに助けて欲しい。それぐらいです。

≪全体として≫学校生活，教室とかすごく浮かんできて，クラスとかだと自分と仲良くできない人ともいなくちゃいけないので，その人達と仲良くしようとするのに，そうできない自分をどうにかしなくちゃと思っていて，そうできなくてそれに関しての孤独な気持が，ここに浮き上がってきた全体だと思いますけど。今の気持というよりも，もっと小さかった頃の学校というイメージがします。4月頃の新しい場面に適応できていない自分。今は大学に慣れてきました。

補足質問：「就職試験で心細かった」→短大から4年制に編入したので，その前の就職活動をしていたんです。まだ自分の気持とか行き先が決まっていなかったので，何をしたいのか，どう動いたらよいのか分からなかったので，心細かった。

「うちとけるのを拒否している」→仲良くない人がそうするだけでなく，自分のほうでもうちとけるのを拒否している。

＜被検者Ａについての総合的解釈＞　被検者Ａは，イメージや解釈に際して，当該クラスターに直結する内容を報告するにとどまらず，他の部分や全体へと拡大し関連づけながら報告している。また，クラスター間の比較においては，いずれかあるいは両方のクラスターからの連想的イメージが主体で，差異部分についての言及がほとんどなかった。孤独感の原因となった編入学から７カ月しか経過しておらず適応不全状態が持続していることから生じる自我防衛のため，また連想項目数がかなり多いので，意識化したり内容をまとめにくかったのではないかと考えられる。

クラスター１：被検者Ａは，「就職試験で心細かった」ときでも何とかなったし，編入という新しい環境でも「勇気を出して話しかける」ことで「さみしい」状態をなくするように，「その場にいない親しい友達にあとで心のうちを話す」のと同じことができる人を得るために「誰かと仲よくしたい」と思う。そうして「落ちつきたい」「楽しくしたい」と思う。しかし，「仲良くない人と一緒のグループにいて」孤独な自分を見せないようにし，仲よくない相手がそうであるだけでなく自分のほうからも「うちとけるのを拒否している」。「夜」などのように，「１人ぼっち」になって，他人に気を使ったり，「心配になる」ことなどない，気楽な孤独を得るために家に「早く帰りたい」と感じる。マイナス項目の方が多いけれど，プラスが，他のクラスターではいずれも１項目のみであるのに，ここでは４項目もある。そこで第１クラスターは，相対的にプラスイメージが最大である。クラスター２では，相手に○○してほしいとかの受動的な期待や，逃げ出したいなどの回避と状態の記述が中心である。またクラスター３は「バリアーをはる」を除けば状態・状況の記述である。クラスター１では，アンダーライン部分が示すように，被検者自身が能動的に行動することへの意欲を示す項目が多い。＜仲よく打ち解けられる人を見つけるための働きかけ＞のクラスターであると解釈できよう。

クラスター２：「初対面の人とあまり打ち解けるときに自分から積極的に話しかけれない方なので，いつも様子を見てしまう。まわりの人がどう動くかを見ていて，それからでないとうまく打ち解けられない」との開示にもあるように，見知らぬ人の「まわりの目が気になる」し，落ち着かないで緊張している。「安心したい」誰か「守ってほしい」，「待っている」「つまらない」，「誰かを頼る」「つらい」「誰かわかってほしい」，私に誰か「話しかけてほしい」，「私はその場にそぐわない」「逃げたい」。能動的な表現は，「誰かを頼る」だけである。既述のように他者に頼る受動的な姿勢と状況記述が中心である。＜他者からの支援の期待とそれがないときの回避希望＞を意味すると考えられる。

クラスター３：このクラスターは編入学式直後の異和感や不安による孤独感でまとまっており，以下のように，連想項目を単純に並べるだけで全体のイメージや内容が浮き彫りとな

る。項目は，「他人のうわさにびくびくする」，「バリアーをはる」，「緊張している」「入学式」「新学期の教室」，「まわりにかべがある」「浮いている」である。これらは入学式以降の状態・状況の記述である。＜編入学直後の緊張と疎隔感＞のクラスターであるといえよう。

全体として：被検者による全体イメージについての報告では，「学校生活，教室とかがすごく浮かんできて，クラスとかだと自分と仲良くできない人ともいなくちゃいけないので，その人達と仲良くしようとするのに，そうできない自分をどうにかしなくちゃと思っていて，そうできないことから，孤独な気持が生じている」とのことである。また，「今の気持というよりも，もっと小さかった頃の学校というイメージがします」は，小さかった頃（小学校低学年時？）に教室で孤独感を感じたことがあり，編入学したことでその当時の不適応感が再現したと考えられる。しかし，「4月頃の新しい場面に適応できていない自分。今は大学に慣れてきました」と発言していることから，時間的には，クラスター3が編入学直後の4月，クラスター2がその次，クラスター1が入学7カ月後の今，であることが推測される。新しい環境に入った直後の＜編入学直後の緊張と疎隔感＞が，同じクラスの＜他者からの支援の期待とそれがないときの回避希望＞へと変わるが，一緒にいて落ち着いたり楽しんだりができない仲良くない人とは，自分からもうちとけるのを拒否し，＜仲よく打ち解けられる人を見つけるための働きかけ＞へと変化したのではないかと考えられる。自己への閉じ篭もりに終わらず，いずれもプラス項目である「その場にいない親しい友達にあとで心のうちを話す」「誰かと仲よくしたい」「勇気を出して話しかける」ことへの意欲が窺える。単一事例であるが，個人独自の孤独感の構造を診断的に評価するのに有効な成果が得られたといえよう。

PAC分析によって析出された被検者Aのイメージ構造は，編入学という環境変化から生じた彼女の孤独感と，小さかった頃の教室での孤独感と彼女の適応様式の再現という，個人的特徴を鮮やかに描き出している。我々がこの構造を了解できるのは，被検者自身の連想項目のクラスター構造を手がかり刺激として彼女の内面の探索に同行し，連想的意味やエピソード記憶を聞き取ることができたからである。個人特有の連想的意味や体験内容を反映するイメージ構造の了解には，不可欠ともいえる技法である。これが内藤（1997，2002a）のいう「現象学的データ解釈技法」である。本研究で示されたように，外在化された被検者の自己を，あたかも調査データを解釈するための共同作業であるかのように，検査者とともに内面深くを探索していく作業は，初回でも利用可能な面接技法として有効であるといえよう。1度の検査のみで深い分析ができる点は，短期療法のツールとなることを示唆する。さらに，クラスター構造と，そこから連想され，解釈される内容についての被検者自身の報告を加えての総合的解釈の結果は，第三者へのコンサルテーションにも使用することができる。本研究は，3年次編入学生の孤独感の分析を通して，PAC分析がこれらの有用性をもつことを明らかにしたということができよう。

引用文献

Blauner,R. 1964 *Alienation and freedom : the foctory worker and his industry*.（ブラウナーR.

佐藤慶幸（監訳）　吉川栄一・村井忠政・辻　勝次（共訳）　1971　労働における疎外と自由　新泉社）

閻　喜・内藤哲雄　2005　日本人と中国人の人間関係スキーマの差異　日本応用心理学会第72回大会発表論文集, 65.

広沢俊宗　1985　孤独の原因，感情反応，および対処行動に関する研究（Ⅰ）　関西学院大　学社会学部紀要，51，157－168.

広沢俊宗　1986　孤独の原因，感情反応，および対処行動に関する研究（II）　関西学院大　学社会学部紀要，53，127－136.

工藤　力　1986　思春期の孤独感に関する研究　心理学研究，57，293－299.

Miller,G.A.,Galanter,E.H. & Pribram,K. 1960 *Plans and the structure of behavior*. Holt.

諸井克英　1989　大学生における孤独感と対処方略　実験社会心理学研究，29，141－151.

諸井克英　1995　孤独感に関する社会心理学的研究　風間書房

内藤哲雄　1993　個人別態度構造の分析について　人文科学論集（信州大学人文学部），27，43－69.

内藤哲雄　1995　個人別態度構造に関する研究　平成６年度科学研究費補助金（一般Ｃ）　研究成果報告書

内藤哲雄　1997　PAC 分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待　ナカニシヤ　出版

内藤哲雄　2000a　留学生の孤独感の PAC 分析　人文科学論集＜人間情報学科編＞信州大学人文学部，34，15 －25.

内藤哲雄　2000b　編入生の孤独感の PAC 分析　日本グループ・ダイナミックス学会第48回大会発表論文集，172－173.

内藤哲雄　2000c　孤独感の PAC 分析：接近・回避ループ型の事例　日本心理学会第64回大会発表論文集，275.

内藤哲雄　2001a　留学生の孤独感の PAC 分析について　日本応用心理学会第68回大会発表論文集，129.

内藤哲雄　2001b　中国人留学生の孤独感の PAC 分析　日本グループ・ダイナミックス学会第49回大会発表論文集，224－225.

内藤哲雄　2002a　PAC 分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待（改訂版）　ナカニシヤ出版

内藤哲雄　2002b　韓国人留学生の孤独感の PAC 分析　日本教育心理学会第44回総会発表論文集，610.

内藤哲雄　2003a　韓国人既婚男子留学生の孤独感の PAC 分析　日本教育心理学会第45回総会発表論文集，674.

内藤哲雄　2003b　中国人交換留学生の孤独感の PAC 分析　日本応用心理学会第70回大会発表論文集，85.

内藤哲雄　2004　韓国人教員研修生の孤独感の PAC 分析　日本グループ・ダイナミックス学会第51回大会発表論文集，182－183.

内藤哲雄　2005a　中国人留学生による日本人の人間関係スキーマ：日本人との交流で形成されたスキーマの PAC 分析　日本心理学会第69回大会発表論文集，160.

内藤哲雄　2005b　台湾留学生による日本人の人間関係スキーマの PAC 分析　日本社会心理学会第46回大会発表論文集，360－361.

Naito, Tetsuo　2006　Analysis of Personal Attitude Construct about a Scheme of Japanese Interpersonal Relation. *Paper presented at 26th International Congress of Applied Psychol-*

ogy, July 16-21, 2006, Athens, Greece, Program Book, 129.
内藤哲雄　2007　台湾留学生による母国の人間関係スキーマのPAC分析　日本応用心理学会第74回大会発表論文集，78.
内藤哲雄　2008a　中国人留学生による母国中国の人間関係のPAC分析　日本応用心理学会第75回大会発表論文集，39.
内藤哲雄　2008b　PAC分析を効果的に利用するために　内藤哲雄・井上孝代・伊藤武彦・岸　太一編　PAC分析研究・実践集1　序章　ナカニシヤ出版，1－33.
落合良行　1982　孤独感の内包的構造に関する仮説　教育心理学研究，30，69－74.
落合良行　1983　孤独感の類型判別尺度（LSO）の作成　教育心理学研究，31，60－64.
落合良行　1985　青年期における孤独感を中心にした生活感情の関連構造　教育心理学研究，33，70－75.
落合良行　1999　孤独な心：淋しい孤独感から明るい孤独感へ　サイエンス社
大橋敏子　2008　外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入　京都大学学術出版会
Peplau, L.A. & Perlman,D. 1982 *Loneliness : a sourcebook of current theory, research and therapy.* John Wiley & Sons, Inc.（ペプローL．A．&バートンD．加藤義明（監訳）　加藤義明・渡邊芳之・渋谷昌三・長田久雄・工藤　力・松井　豊・古澤照幸・落合良行・広沢俊宗・若林佳史・西川正之（訳）　1988　孤独感の心理学　誠信書房／ほぼ半分の抄訳）
Seeman,M. 1959 On the meaning of alienation. *American Sociological Review*, 24, 783－791.

（2008年11月14日受理，11月18日掲載承認）